



科学通信網の形成と初期郵便事情：
王立協会秘書時代のオルデンブルグ 第二部

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 務 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006336

科学通信網の形成と初期郵便事情

——王立協会秘書時代のオルデンブルク 第二部——

金子 務

一、十七世紀後半の郵便事情

前回までに、オルデンブルクがなぜ王立協会秘書となり、その重要かつ私的な定期刊行科学誌『フィロソフィカル・トランザクションズ』を出すに至ったか、を記した。本稿では、オルデンブルクがその生涯にわたって交信した書簡を通覧しながら、ヨーロッパにイギリスを中心とする通信ネットワークをどう作っていったかを見ていくことにする。ただし、紙数の関係で、ここではオルデンブルクの全書簡集十三巻のうち五巻まで、年代でいえば一六五〇年代から一六六九年五月頃まで、ちょうど王立協会秘書生活の前半までの時期における郵便問題に話を限定する。

通信ネットワーク形成の研究にさいして重要なことは、「いつ、どこで、だれが、だれと、なにを、どのように」(when, where, who, whom, what, how)という5W1Hを押さえながら、情報発信者と受信者の役を交互に演じているオルデンブルクの送受するメッセージの内容を仔細に読みとっていくという地味な作業である。筆者はその量的解析を一方で進めているが、旧来の伝統的な史料解読という質的分析がやはり基本であると考えている。本稿は後者の意味での作業の

一端に相当する。その完備した姿を知っている二十世紀の目からすれば、郵便問題が、通信ネットワーク形成上の中心問題になるとも思えない。しかし十七世紀後半というヨーロッパ世界においては、近代的な郵便制度は形成途上であり、流動的かつ不安定で、その成否が即、ロンドン王立協会を中心とするヨーロッパ科学の制度化を支える神経網の成否を左右するといっても過言ではなかった。公的な制度が不完全であれば、それだけ情報の送受信の「クリアリング・ハウス」あるいはサミュエル・ハートトリブの夢みた「普遍的な宛先局」²⁾たらんとしたオルデンブルクの、通信網形成の創意工夫と努力が必要とされることは想像に難くない。

本稿が王立協会秘書時代のオルデンブルクの前期に限って、それも通信ネットワーク形成のインフラストラクチャである郵便問題に絞って、その多様な姿を、オルデンブルクを中心とする自然研究者たちの往復書簡から適宜抜き出し訳出しながら、当時の関係者たちの努力を描いていくことにしたのも、以上の理由による。

イギリスで「郵便」を意味するpostという言葉が使われ出したのは、十五世紀末、エドワードIV世の時代で、ラテン語のponere(置く)から生れたpostiaの縮小形postaがフランス経由で導入されたのだという。³⁾

そのイギリスの十七世紀の郵便状況はどうかといえ、徒歩郵便、騎馬郵便のほかには「キングス・ポスト」という官営の駅馬を利用する駅郵便が道路の整備とともに延び、ロンドンを起点としてスコットランド行き北街道、ドーヴァー街道、さらに南のプリマス、西のブリストル、北のウェスト・チェスターという幹線には駅郵便が確保されていた。しかし速さと信頼性に欠けるため民営の駅郵便が発達し、こちらはたとえばロンドン・プリマス間を片道三日で走った。曲りなりにも官営の駅通路線網が整備され出したのは一六三五年、「イングランドおよびスコットランドの書状取扱所の設置に関する布告」が出されてからで、料金の制定と駅郵便の国家独占が始まった。クロムウェル治下になって、高い上納金を政府に納めた民間人による請負制度になった。その頭目が郵便長官と呼ばれた。

一六六〇年五月の王制復古後、請負制は存続したが、その利益は国王の私有とされ、王室の財政基盤を強化した。チャールズ二世(在位一六六〇―一八五)の年間利益は五千ポンドを超えた。やがて請負制も廃止され、幹線を中心に支線郵便も増えた。一六七〇年代に入ると、多くの書状引受所で月日を示すスタンプ、すなわち「ビショップの郵便印」が押され出し、郵便物の送達時間の短縮に貢献した。一方、民営の非合法郵便のいわゆるペニー郵便は国内全国一律で一ペニーですむところにその名がある。一六八〇年の創始であったから、オルデンブルクの時代にはまだ出現していなかった。

なお新郵便法(一六六〇年)以降、国王の裁下で国会議員が受けたり出したりするシングル・レターは無料扱いとされた。一般に料金は受取人払とされていたので、これは大きな特権であった。ロンドンには内国郵便総局と外国郵便総局の、内外二つの集中管理局が生れ、そ

の合併は十九世紀になってからである。内国郵便物は、昼間から夕方にかけて集められ、夕方から夜に宛先ごとに区分し、真夜中に発送された。翌朝、地方から到達の郵便物が配達された。また外国郵便物は、フランス行きが月・木、オランダ行きは火・金、フランダース行きが月・金の締切りで発送され、到着便も同じ曜日になっていたが現実には不規則だった。外国郵便物はすべて料金前払いが要求された。

当時の内国郵便料金は、距離と用紙枚数と重量の三つの要素から決

	シングル・レター	ダブル・レター	その他(1オンスごと)
<内国> (1660制定)			
ロンドン差出し	2	4	8
80マイル未以	3	6	12
<外国> (1657制定)			
リヴォルノ、ジェノヴァ、フィレンツェ、リオン、マルセイユ、アレppo、コンスタンティノープル	12	24	45
ポルドー、ロシエル、ナント、カディス、マドリッドなど	9	18	24
ハンブルク、フランクフルト、ケルン	8	16	24
ダンツィヒ、ライプティヒ、リュベック、ストックホルム、コペンハーゲン、ケーニヒスベルクなど	12	24	48

表 17世紀後半のイギリスの郵便料金(ロンドン起点)

められていた。一六六〇年制定の料金表では、距離は八十マイル未満と以上の二大別、用紙が一枚だけのシングル・レターと二枚使うダブル・レターの二種類、それ以上のものやその他のものは一オンスごとの料金となっていた。外国料金についても一六五七年制定のものは宛先地別のほか、用紙数と重量刻みになっている。たとえばロンドン差出しの料金は上の通り。(単位、ペンス)

二、初期書簡集から見た郵便と通信網

▼書簡集第I巻 (Letter 1—251: 16 Aug. 1641—21 Dec. 1662)

オルテンブルクが、公的なキャリアーを開始するのは四十五歳でプレーメン市の外交官としてだから、それ以前の書簡がきわめて少ないのは当然であろう。一六五三年にロンドンで居住するようになる以前のもは一通しか残っていない。一六五三年から王立協会秘書になるまでの一六六二年に至る書簡の多くは、写しやメモの形でロンドン王立協会に保存されているが、初期のオルテンブルク宛のものとはほとんど失われた。とくにオルテンブルクの若きスポンサーでもあったロバート・ボイルがオルテンブルクに宛てたものがかかり失われたことが、パーチの記録との照合から明らかである。残存したこの時期の多くが往復書簡集第I巻を占めるが、その中から、郵便に関する項目を抜き出しておく。文頭の「」内の数字は書簡番号である。

〔88〕貴下の九月二十二日付書簡のご指示は今月十四日まで届きませんでした。その時田舎にいたものですから急ぎロンドンに向かい、十六日に到着しました。「プレーメン市議会宛、一六五四年十月二十日付。プレーメンーロンドン間が二十四日間かかった」

〔89〕アイルランドから入手された郵便を迅速に発送なさって頂いて感謝申し上げますが、郵便というよりはってくるような次第で、とんと郵便にお目にかかりません。貴下の十一日土曜日付書簡が今週の水曜日夜にもまだ届きません。どこかに立往生してなければ月曜日には着くはずのものです。「ボイル宛、一六五七年四月十五日付。両者ともに同じオックスフォード市内にいた。ふつうは市中

で二日もあれば届くのが四日経っても届かず」

〔69〕今週貴下から十二月十日付と十六日付の二重のニュース、もう一度われわれは喜びました。一方の郵便にはラニラー夫人の一通とデュリー御夫妻の二通が同封。「オルテンブルクはこの時、フランスのソミュールに、若い貴族リチャード・ジョーンズのグラント・ツアーのため帯同していた。ロンドンのハートトリブ宛、一六五七年一月九日付。しかし二通が行方不明、海賊に郵便船が襲われたためか、と報告。ロンドンーパリ間が二十四日かかっている」

〔73〕貴下の？氏宛書簡のご健康についての良いお報せ……しかし私たちの書簡の束を受け取ってはいないご様子。「ソミュールからオックスフォードのボイル宛、一六五七年三月十九日付」

〔133〕往復書簡は貴下の友情を受けるといふ栄誉を保つのにたいへん役立つて喜んでいきます。しかし残念にも私がお約束した書籍類が英国から届くのがたいへん遅れていて残念です。私の友人たちができるだけ早く送ると約束してくれているのですが。ロンドンーパリ間にパリーカースル間のような急行便があったら、とうの昔に入手できたでしょう。そうはいきませんから、知り合いが当地に旅行し親切に持ち帰ってくれるチャンスが到来するまで待たねばなりません。「パリからカースルに住む医師または法律家のサポルタ宛、一六五九年六月十八日付」

〔138〕国家機密のことを書く労を惜しまないで下さい。といいますのも書簡百通のうち一つだけが不明になることはまずありませんから。「パリよりハートトリブ宛、一六五九年七月十二日付」

〔152〕……その内にその結果の報告があるのでしよう。……道の長さ、多くの人々による書簡の運搬のために到着速度が遅くならざ

るを得ません。〔同じパリ市内のサポルタ宛、一六五九年八月十一日付〕

[251] 十月十日、十二日につづいてまた手紙でお邪魔します。こういう場合通常は二通作ります。特別な場合は三通にします。土曜と日曜は私の使える日ではなく、月曜は議会の前に隣人たちと論点を整理するためにもぎ取られます。そこで走り書きですが、この第三のものは第二の書簡の一、二行分しか記しません。第一のが配達されても第二のが着かなければ、この第三がそれに代わる、というわけです。〔ジョン・ピールより、一六六二年十二月二十一日付。配達への信頼性が二分の一か三分の一であることを示す〕

オルデンブルクのパリ時代は、その前のオックスフォード時代とともに、man of letters から man of science へと移行する時期として重要だが、パリを中心としてヨーロッパ各地の科学者たちとも接触を進め、かつボイルやハートリブ¹²⁾など国内の有力科学者との親密の度を深めている。彼我の国内郵便の遅滞を歎く No. 52 や No. 133, 152 が注目されるほか、後者便で、中継による不確さをオルデンブルクが十分に認識しているのは、国内国外を問わず、信頼できる拠点づくりの重要性にその目が向けられていった動因となったと思われる。

▼書簡集第Ⅱ巻 (Letter 252—477; 4 Jan. 1662/3—late Dec. 1665)

この時期は、オルデンブルクが王立協会秘書としての地位を築いていく時代に相当する。記録の整備は秘書以前の時期に比べ、明確に改善されており、とりわけ一六六五年のペスト騒ぎのときにもロンドン

に踏みとどまって交信を維持し、『フィロソフィカル・トランザクションズ』創刊(一六六四/五年三月六日創刊号)とあいまって、王立協会の瓦解を防いだ功績は大きかった。

この時期の交信でもやはり行方不明のものが少なくない。オルデンブルクの往復書簡集では、編者であるホール夫妻の方針により、内容の有無にかかわらず、日付のほぼ判明したものはみな通しの書簡番号が付いている。しかし、たとえばジョン・ピール¹⁴⁾は一六六四年同様に六五年においてもオルデンブルク宛に書いているはずだが、ほとんど収載されていない。またアイルランドのロバート・サウスウェル、チェシャー在住のブレルトン卿¹⁵⁾、オックスフォードのジョン・ウォリスとロバート・モレイ卿¹⁶⁾およびボイル宛に、かなり頻繁にオルデンブルクが手紙を書いたはずだが、ほとんど不明である¹⁷⁾。

いずれにせよ、一六六二年までにオルデンブルクは国内はもとより、ヨーロッパ大陸、新大陸で王立協会の顔になっていく。すでに内外二十五人以上の恒常的交信者を持ち国内では王立協会と地方のヴァーチュオーソたちとのリンク役になり、外国ではダンチッヒの有名な天文学者ヘヴェリウスとの通信網を作るのに成功(一六六三年二月)、ロンドン・ダンツイッヒ間の面倒な、しかし実り豊かな交信がつづいていく。

ここでは、まず第Ⅱ巻の郵便事情を、書簡から拾い出しておこう。

[280] 貴下のテオフィルス・ジョンズ氏宛書簡を送りました。

しかし今後は貴下がご自分で送ったらと思います。……なにか良い印刷本に出会いましたら、小さな本等なら郵便料金なしで、彼の入手するところになります。(ロバート・サウスウェルより、一六六

三年六月十七日付)

〔386〕熱測定論の御高著の残り、無事に入手。その運び手について少しお報せしなければなりません。そのものから運送代を請求されただけでなく、……オックスフォード・ロンドン間の運送賃も要求されました。しかし記録簿を見ましたら表紙の一部が破られていて、そこは「運送人支払済み」(Carrier Paid) という言葉が書きこまれる場所でした。私を欺こうとしていると思えたので、その要求額の部分は支払を拒否しました。……運送人は袋の中で他のものとこすれたためだと言いました。しかし偶然というにはあまりに人為的です。私は拒否しつづけて、オックスフォードの差出し人にそのことを郵便で問い合わせみて、払われていないならば、こちらで払ってもよい、と付け加えました。(ボイル宛、一六六四年十月十三日付)

〔386〕さる土曜日に寒冷の実験誌の最初の部分を受取り、印刷に回しました。印刷人のほうから印刷し終えた紙を送ってきたものと思います。月曜の運送人が郵便馬車で送られたものは、今の時間になってもまだ受取っていません。手紙一通のみで、その上書きに書いてある記録巻紙もついていません。それを私の留守中に受取ったメイドも見えていません。メイドは昨日朝私といて、調べてみると約束したのですが、その後見かけないし、巻紙も聞いていません。……運送人や馬車屋連中は救い難いです。この手紙が郵便で来たのなら全部で二ペンスしかかからないのに、私の家でグロート〔四ペンス貨幣〕もとり、さらにオックスフォードではあなたが支払いずみなのですから——。(ボイル宛、一六六四年十一月三日付)

〔411〕この前のあなたのお手紙の封印が破れていましたが、両側

のロウがすっかり付いていたため開封されませんでした。封印をずる紙の端にロウを落とすさいよく注意したほうがよいです。黒いロウは他の色のロウよりもふつう壊れやすいですから。(ロバート・モレイ卿から、一六六五年九月十六日付)

〔423〕九月三十日付のあなたのお手紙はR・モレイ卿のと同日付で、こちらのほうは火曜に受取りましたが、あなたのほうは今朝まで届きませんでした。なぜごうも違うのか想像もつきません。またその時私は留守にしていたので、訊ねてみることもできませんでした。(ボイル宛、一六六五年十月五日付)

〔43〕貴下の九日と七日付への返事です。どうしてこれらの手紙がこんなに遅れたのか、その理由は当方で郵便が滞ったためです。といいますのは秘書が以前の時間よりずっと後に発送したためです。(モレイ卿から、一六六五年十月十日付)

〔439〕今週書いてお送りした手紙を受け取ったことと存じます。また憐れな元気のない国家に対し負っている義務に一、二回かかずらわっているため(その計算書を委員会で午後五、六時間も成算もなく待ちつづけているわけです)、規則的に交信をしたいと存じておりますあなたへのご連絡を、一週間も十日間も中断したりすることをお許し下さい。(ボイルから、一六六五年十月二十二日付)

No. 386, 346は当時の配達人のモラルがどんなものであったかを示す。また遅配の原因には差出人の側での滞留もあることも指摘されている。ボイルとの関係がいかに親密であるか、その一端もわかる。

ここには出て来ないが、この時期にオルデンブルクはドイツや北欧

の拠点づくり(エッカルト・ライヒナー⁽²¹⁾、ダニエル・マヨール⁽²²⁾、フィリップ・ヤコブ・ザックス⁽²³⁾)を進め、オランダのスピノザ⁽²⁴⁾とも短い重要な交信をしている。熟知しているフランスについては、最良のパリの科学者たち、ピエール・プティ⁽²⁵⁾、アドリアン・オズー⁽²⁶⁾、アンリ・ジュステル⁽²⁷⁾らとの交信がつづき、とくにジュステルは恰好のフランスにおける拠点になっていく。またオズーを通して、最新のイタリア情報も入手している。とくにフィレンツェのアカデミア・デル・チメントの活動に注目する。またアムステルダムからはペーター・セラリウス⁽²⁸⁾が情報を送ってくる。一方、一六六四年春にはアメリカ植民地との通信網をねらって、コネチカットのジョン・ウインスロップ⁽²⁹⁾とバミューダのリチャード・ノーウッド⁽³⁰⁾に手紙を送った。しかし手紙はうまく着かず、直接交信は一六六七年まで成功しなかった。なおオルデンブルクは各国に情報源を持つことで、科学だけでなく政治向けのニュースを国内の有力者に提供して収入の一助にしたことが指摘される⁽³¹⁾。

▼書簡集第三巻 (Letter 478-710 : 6 Jan. 1665 / 6-30 Nov. 1667)

オルデンブルクにとって一六六六年から六七年は最も劇的な時期であった。

一六六五年の黒死病騒ぎで王立協会は八カ月集会を休み、再開したのは一六六五/六年二月二十一日であった。ところが同年九月のロンドン大火で王立協会は集会場所を失った。それでもオルデンブルクは情報センターとしての機能を維持し、『トランザクションズ』は、一時オックスフォードに発行所を移し、モレイ、ボイル、ウォリスらの協力によって継続していった。協会はアルンデル・ハウスに移り、グ

レンシャム・カレッジに一六七四年に戻るまでの六年間を間借りすることになる。黒死病とロンドン大火はイギリスの書籍取引に破壊的な作用をした。これを回復するのにも尽力していたオルデンブルクに、さらに追い打ちがかかる。一六六七年六月にスパイ容疑でロンドン塔に二カ月間投獄されるのである⁽³²⁾。やがて釋放されたが、この事件の背後には英蘭戦争があったことは確かである。

「外交官」出身のオルデンブルクはオランダから政治ニュースも得ていた。そのことは、アムステルダム発のニュースとしてボイルその他に数多く報告されていることから否定できない。しかしそれらに相当する書簡は一つを除いてすべて破棄されたようである。一つ残っているというのが、オルデンブルクとスピノザの書簡や書籍の交換を仲立ちしていたセラリウスからのものであった。これが投獄の口実を与えたようである。もともとオルデンブルクは、アーリントン卿の補佐官ジョゼフ・ウィリアムソンに各国の情報を入れていた。ペルメル街の自宅ではなくウィリアムソンの事務所に、海外からの郵便物を送らせていた。“Monsieur Grubendol, London”という宛先だけで、その事務所に行き、そこで郵便料金はウィリアムソンが立て替え払いをした。書類は未開封のまま召使いによってオルデンブルクに届けられ、そこでウィリアムソンに役立つような政治的ニュースを素早く抽出して、それを提供するというシステムになっていた。ところが、なにかの事情でたまたま問題の一通がウィリアムソンにより開封され、戦争批判の文面が激怒させることになったのだろう。

同じように、パリからの情報も主としてジュステルから週一回のペーシで送られていたはずである。それはボイル宛のビールの手紙にフランスの科学者たちの消息が頻繁に載っていることや、パーチの記録に

照らしていることである。しかし残っているジュステルの手紙が少ないことから、破棄された可能性がある。国内ではボイルと週一回のペースで手紙を交換していたが、その多くも失われた。一方で、オルデンブルクはオックスフォード・グループとロンドンのグレシャム・グループとの仲介も行っている。その一例がオックスフォードの医学者、リチャード・ロワー⁽³⁴⁾の紹介などから窺える。またリエージュに忠実な通信者、スルス⁽³⁵⁾を一六六七年に見出して、オックスフォードのウォリスと間接的な交流に持ちこんでいる。またサフォークの田舎医者ナサニエル・フェアファックス⁽³⁶⁾、デヴォン出身の素朴な若者サミュエル・コールプレス⁽³⁷⁾などが、この時期に新たな通信者として加わっている。

またイタリアの情報がパリ経由でロンドンに入っている。一六六七年末、オルデンブルクは、すでに解剖学上の発見によって有名なマルビーギ⁽³⁸⁾との直接交信を開始する。それまでイタリアにはヴェネツィアのトラヴァージノ⁽³⁹⁾とミラノのセッタラ⁽⁴⁰⁾がいたが、名声の点ではマルビーギが群を抜いていた。しかしイタリアを相手とする場合、郵便問題が深刻であった。オルデンブルクはのちに知るが、たとえばフィレンツェに住むイギリス人、ジョン・フィンチ⁽⁴¹⁾卿への手紙の多くが届かなかった。

では第三巻の書簡から郵便事情を示すものを拾い出してみよう。

〔565〕六月三日と〔七月〕二十八日付のダンツイッチヒからの私の二通の手紙を受け取られたことと存じます。そこで最後のあなたのお手紙にかなり長く返事を致しました。それ以来返事を頂いておりません。ダンツイッチヒからオステンドに直航する船で私の著書八部をいろいろなルートであなただ宛に送ることができることになりました

たので、いまこの手紙を書こうと思った次第です。……そしてこのようなものは容易に失われてしまいがちですので、一隻の船にもう二部、あなた宛にもっていてもいい、友人たちに配布してもらいたいと思います。もしも前の部数をすでに入手されている場合は、このあとの二冊を本屋でなにか最近出版されたものと交換して、然るべきコースで私のもとに送って下さい。(ヨハン・ヘヴェリウスから、一六六六年九月五日付)

〔588〕送って頂いた本一包み、無事受取りました。心から感謝申し上げます。……ところでこれらの本代の額と迅速な支払方法をお教え下さい。といいますのは友としてのサーヴィスは骨の折れるものであつてはなりません。さもないと、私はあなたに今後ともご好意をお願いできなくなってしまいます。そのため私に送って下さるものの値段をすぐに教えて下さることを切に願います。(ヘヴェリウスから、一六六六年十二月八日付)

〔628〕私はこれまで、郵便料金があなたのような立派な教養ある方々から頂戴する贈物の価値を上回るなどと考えたこともありません。あなたがそうでないとお氣遣い下さるのでしたら、どうかイプスウィッチ・コーチズ便を使って下さい。アルドゲイト近くのブルー・ポアから毎週月曜と木曜に出ます。(なんでも荷はイプスウィッチのミスター・ターナーズ薬店で下すように指示して下さい。毎週一回私はそこに寄ります。)(ナサニエル・フェアファックスから、一六六六/七年一月二十五日付)

〔639〕あなたの二月六日付のお手紙にこれまで返事も差し上げなかったもので、きつとご不審に思い、私の沈黙を大いに非難なさることと存じます。しかし私の手許に届いたのは(どんな郵便の間違い

があったのか) やっと昨日だったのです。このことを知って頂ければこのような遅滞を遺憾に思われたいですむことと存じます。「ルネ・フランソワ・ド・スルスから、一六六七年五月十日。ロンドンからベルギーのリエージュまで三カ月以上かかったことを意味する」〔64〕あなたは郵便局長が私の手紙を届けなかったとして怠業を非難されました。しかし私はあなたの手紙を運んだ勤務ぶりを賞めたいと存じます。五月二十日〔新暦〕に書かれたお手紙が同じ月の十九日〔旧暦〕に着いたのですから。「スルス宛、一六六七年六月六日付。今度はリエージュからロンドンまでわずか九日で着いたことになる」

〔65〕あなたの十月六日〔新暦〕付の親切なお手紙を十五日に受理。郵便局がやっと義務を果たしてくれて、私たちが哲学上の往復書簡を精力的に取りかわすように大いに勇気づけてくれたことを喜んでおります。「スルス宛、一六六七年十月二十三日付」

〔66〕あなたのお知り合いのハンガリーのマルクーズ氏が当地の私のところにおります。彼はハンガリー産自然物の蒐集作業中です。彼は高名な〔ロンドン王立〕協会宛により便利な伝言を望んで、まず私に連絡をとる予定です。当地からはバルティック海かハンブルク経由のルートがたくさんあり、品物は簡単にあなたのところまで届けることができます。「フランクフルトのJ・C・ベックマンから、一六六七年十一月十日付」

書物などの小荷物を的確に送ることに、送り手も受け手も大いに腐心している。

この時期に新しく加わって来たものは、ほかにポーランド系ドイ

ツの天文学者ルビエニエツキー⁽⁴²⁾などがあるが、一六六七年の時点で内外の恒常的交信者三十人、この年一年で百五十通以上の書簡を受していることになる。大火、投獄という打撃にもめげず、一六六七年晩夏には王立協会も機能を回復していった。

▼書簡集第IV巻 (Letter 711—935: 3 Dec. 1667—24 July 1668)

期間はわずか八カ月だが、その間に二百二十余通だから、なかなか高密度である。オルデンブルクの秘書時代を通して、一六六七年から六八年にかけては通信のピークの時期といつてよい。地理的分布に十分な配慮を示している。手紙はヨーロッパ各地からまた国内各地方から、途絶えることなく流れこみ、流れ出している。その一方で、オルデンブルクが出した書簡で現存する数は少ない。この時点では自分の書簡の写しを保存する習慣はまだなかった。またボイルがオックスフォードを一六六八年春に去って、書簡集の上での有力な情報源を失うことになる。

イタリアへの情報工作がまた一段と進んだのもこの時期である。一六六八年春、アカデミア・デル・チメントの秘書、ロレンツォ・マカロッティ⁽⁴³⁾が英国とフランスを訪問した。オルデンブルクはすかさずこの機会を捉えて、まだパリにいるマガロッティにイタリアに戻り次第、定期的な交信を今後も継続することを確認している。また若いドイツ人のマティアス・パイセン⁽⁴⁴⁾も一六六八年春の訪英後、定期的な交信者となり、ヨアヒム・ユンギウスの弟子、マルティン・フォーゲル⁽⁴⁵⁾も新たに加わった。

この時期の注目点は、一つは天文学の話題が衰退したことである。逆に数学的の話題が盛んになった。ヘヴェリウスはあまり書かず、オズー

もウォリスも天文学を論じなくなった。マルピーギはせつせと論文をレターの形で送って来ている。オルデンブルクはそれを王立協会から出版させることになる。フランスとの関係も活発で、オズーの他、数学者のド・ロネー、ドゥローランやまた哲学者のコルドモアたちで、いずれも自分たちの著書を送ったり、『トランザクシヨNZ』中の書評に反応したりしている。これらは明らかに『トランザクシヨNZ』に寄稿することが、ヨーロッパの科学者たちにとって重大な関心になりつつあったことを示している。オルデンブルクの意図は確実に実現しつつあった。また書評の意義も認識され始めた。はじめはウォリスが、のちには一六六七年に王立協会会員に選ばれたジョン・コリンズ⁽⁶⁾が、この厄介な仕事を引き受けていく。コリンズはロンドンに住み、しばしばオルデンブルクと会っていたので書簡を交わす必要はあまりなかったが、緊密な関係にあったと考えられる。

書簡の中の郵便問題を見ておこう。

〔719〕リエージュにお手紙を送るさいは、「パリからの」付記文書をあなたのつぎの郵便に同封して下さるようお願いします。送る郵便がない場合は、あなたのお手紙と一緒に郵便局まで運んでもらうよう、あなたの好意に甘えさせて下さい。〔ロンドンのホワイトホールにいるウィリアムソン宛、一六六七年十二月十日付〕

〔720〕郵便配達人があなたや他の国内郵便を昨夜配らないで、今日の午後私が家にいるのを見てやっと思ってきました。〔ポイル宛、一六六七年十二月十日付〕

〔738〕あなたのおかげで受取りました包みの一つに、大量のメロンの種子がありました。これはフランスの最高品種のもので、フ

ランスで最高のメロン栽培家で、イギリス人もフランス人も彼を知る人はみな尊敬している人物から送られたものです。〔ウィリアムソン宛、一六六七年十二月二十三日付〕

〔758〕旧曆十一月二十五日付のあなたのお手紙を、だいぶ遅れて、しかし一カ月とは遅れませんが受取りました。これまで私の返事を遅らせましたのは、私がお送りした幾何学の問題についてのあなたの判断をすぐに送ってもらえるもの、と当てにしていたためです。しかし以来にも便りがありませんでしたので、あなたの返信が途中で行方不明になったか、先の私の手紙に書いた観察が不愉快だったのか、と内心恐れております。いずれにしましても、私の義務からいってもはや沈黙を守べきではありません。〔リエージュのルスから、一六六七／八年一月三十日付〕

〔761〕普通郵便でお送りした昨年十月十一日付の私の手紙を受け取られたものと存じます。また船乗りエリック・カロールソンに托して十月十四日に送りました『王立協会史』一部入りの荷物も無事着いたものと期待しています。私宛になにかを出されるさいは、どうかつぎの宛先にして下さい。A Monsieur/Monsr Grubendol/a Londres. これは陸路で郵便を送る場合です。海路で送る場合はこのようになります。A Monsr/Monsr Oldenburg, Secretaire de le Societé Royale dans le palmal à Londres. 〔ロンドン、ベルメル街、王立協会秘書オルデンブルク氏〕こうしておけばすべて世話してもらえます。〔ヘヴェリウス宛、一六六七／八年一月三十一日付〕

〔779〕二月二日付のお手紙拝受。マルシャル氏があなた宛の本をお渡ししてないとのこと、驚き不愉快なことです。彼がどこに逗留

しているかフランス人に聞いてみて下さい。「パリのジュステルから、一六六七／八年二月十五日付。ロンドンに行ったフランス旅行者は不明。後にこの人物が礼状をオルデンブルク宛に出しているから、一件落着いたのだろう」

▼書簡集第V巻 (Letter 936—1196 : 3 Aug. 1668—31 May 1669)

期間は十カ月で前巻よりもやや長いが、やはり高密度に手紙が集中する傾向がづづいている。それでもかなりの書簡数が行方不明になっていると考えられる。数が増えているのは書記助手の協力が得られるようになったためである。この間に交信者は五十六人、うち新人が十九人である。しかし半ダースの人は間もなく消えてしまう。

イギリス国内では、オルデンブルクは前からのジョゼフ・ウィリアムソン、ジョン・ウォリスと恒常的に交信している。また建築界に進んだクリストファー・レン⁽⁴⁸⁾の寄稿もある。さらにジョゼフ・グランヴィル⁽⁴⁹⁾、ヨシユア・チルドレイ⁽⁵⁰⁾といった人々も登場する。ジョン・ピールやナサニエル・フェアファックスはかなり通信数が減っている。

フランスでは相変わらずジュステルが通信ネットワークの中心にいる。しかしフランス・ヴァーノン⁽⁵¹⁾が一六六九年イギリス大使の秘書官としてパリに派遣されると、政治的関心よりも科学的関心が深まる。そしてホイヘンスの信頼を受け、オズリーの助手であったピカールと友人になり、イタリアからパリに赴任したカッシーニもバーノンを重視した。こうしてオルデンブルクにとって、バーノンはジュステルに代わる有力な通信者になっていった。ホイヘンスとの交信もづづいている。とくにホイヘンスは新発見のプライオリティを獲得するためのアナグラム(回文)方式の暗号を使うことを提案し (Letter 1089) さらに

一六六九年八月には大量の暗号を寄せている。⁽⁵²⁾ このほかにプティ、ドニのような年来の友人との交信もある。一方、ロンドンを訪問したノルマン・コシュレル⁽⁵³⁾もニュースを送ってくるようになる。また一六六〇年に交信のあったマルテル⁽⁵⁴⁾がパリよりもモントーバンから通信を再開する。

イタリアではマカロッティ、フィレンツェのフィンチ、ローマのジョン・ダウンズ⁽⁵⁵⁾、ボローニアのマルピーギらと交信が広がる。ローカントリーズでは三人の常連がいる。ライデンにいるイギリス人のコールプレス、他に数学者スルス、デルフトの若者デ・グラーフ⁽⁵⁶⁾である。ドイツではパイセンとその友人フォーゲルがハンブルクから、またヘヴェリウスもダンツィヒから定期的に書いてくる。

では具体例を摘記しておこう。

[94] あなたのご指示に従って、鉱物問題についての私の観察を短く説明するために、すでに六、七枚分書きました。サンドウィッチ伯のフリゲート艦が出発してしまわないうちにと大急ぎで書きました。なにしろこの半分分量でも郵便では送れないので、同艦に運んでもらうつもりです。(モロッコのタンジールにいるリチャード・ケンブから、一六六八年八月十八日付)

[95] デイジョン議会議員のランタン氏、私の良い友人ですが、私があなたに送ったリストにある数冊の書物入手したいのです。それらの普通の価格がいくらか教えて頂き、面倒ですが買い求めて下さい。いつものように為替手形が一番早い機会に送金致します。ルーアンでペストが流行しているのでカレー経由で送らないほうが良いかどうか、私にはわかりません。英国にランタン氏の甥が出か

ける予定で、この件であなたにお目にかかり、たぶん責任をもつでしょう。「ジュステルから、一六六八年九月初め」

〔388〕それからあなたのご助力を頂きたい件が一、二出て参りました。第一にゴスラー（ドイツ北部、ハルツ山麓にある鉱物産地）産の硫酸塩（緑礬）の見本を入手して、ゴスラーでの火による調整方法について精確な説明をつけて欲しいのです。小荷物はハンブルクにいる商人か知名人宛に送るのが簡単です。そこからロンドンへイギリスの船に積み込んでくれるでしょう。宛先は、N・N・オルデンブルク、王立協会秘書、ロンドン、ペルメル街の自宅です。「ウィリアム・クルティウス卿宛、一六六八年十一月六日付」

〔1005〕あなたの大変有難いお手紙類を拝受。それらは、ロンドンからアムステルダムを経てニューヨークに届けられ、ペーター・ストゥイウエサント氏が落手したものです。一緒に『王立協会史』や『フィロソフィカル・トランザクションズ』の多数の冊子……同氏がニューヨークからボストンに行く信頼できる友人にそれらを托して、慎重な指図にもとづいてボストンから当地（ニューイングランドのハートフォード）まで送られたのです。「ジョン・ウィンズロップから、一六六八年十一月十二日付」

〔1046〕同封書簡を急ぎウィーンまで伝送して下さいますように。本協会会員宛（エドワード・ブラウン）です。当人は間もなくコンスタンチノーブルとモリア（ペロポネソス半島のこと）に向かい、特別な手紙によって哲学のお蔭で職を得ることを望んでおります。

〔ウィリアムソン宛、一六六八年十二月十八日付〕

〔1065〕先日、あなたがローマに発ったことを知りました。そこでいま考えていますことは、あなたは王立協会会員ですから、哲学的

実験や発見を探究し、および当地の有名な会へ成果を通信すること
で彼らの計画を前進させる手助けを容易にすることができるとしよ
う。また、イタリアの哲学者たちとわれわれの間に通信網を確立す
ることもそうです。そのさい哲学上の諸問題で時に彼らが受け入れ
発見されたことにわれわれも与かり、またこちらで同じようなこと
について遂行されることもお返しすることになるでしょう。そのよ
うな取引はローマにいる人（ロンドン在住のスコットランド郷紳の
ヘイ氏という人の友人）から、すでにわれわれの許に提案されてい
ます。ヘイ氏はまだその友人の名を明かすのは適当でないと考えて
いますが、私はサウスウェル師⁽²⁾かレスリー氏⁽³⁾か『ジョルナレ・ディ・
レッテラティ』⁽⁴⁾（文芸ジャーナル）の著者⁽⁵⁾だと思えます。

当地に居られるあなたは、この通信にだれが最適でもっともやり
たがっているか、探し出すのは難しくないでしょう。そしていった
ん仕上げてしまえば、あなたが当地を離れても絶えることなく継続
し盛えるように、この仕事を強固にし安定させることも難しいこと
はないでしょう。しかし郵便がその料金の故にこの「知的」交易の
妨げにならないよう、ここに提案致します。すなわち、この事業に
喜んで加入しようとするローマの人々がわれわれに出す書簡はパリ
まで無料配達され、われわれからパリ経由ローマに出す書簡もロー
マでまた費用をもってもらおう、ということ満足できるかどうかで
すが――。「ジョン・ダウンス宛、一六六八／九年一月三日付」

〔1070〕国王秘書官から普通郵便袋で二通の手紙を落手。いずれも
その筆跡からあなたのものですぐわかりました。一通はダンツィッ
ヒ、もう一通はウィーン宛です。両方とも、フランクフルトに回送
し、友人の助力を求めました。途中で停滞して私が忘れたなどとい

われないように、説明をして発送するのが私の務めというものです。なにしろここはキングス・ハイウェイから（とくにロシアの路線とは）かなり離れていますので。（ウィリアム・クルティウス卿から、一六六八／九年一月九日付。クルティウスのいるグロス・ウムスタットはダルムスタットの東約二〇マイル、ラインとマインの両河にはさまれた小さな町）

〔1074〕グレゴリー氏のお手紙、やっど落手。クリスマス週間には馬車が動かないという理由で、ロンドンの倉庫に長く置かれていたのです。私の返信もあわせてそれを同封します。機会を見てわれわれの友人たちに見せたり、気がすむか適当だと思われましてら送っても送られなくてもけっこうです。彼の手紙が用済みになりましたら、また私宛に送り返して下さい。（オックスフォードのジョン・ウォリスから、一六六八／九年一月十二日付）

〔111〕たいへん有能で王立協会に協力する用意のある人物が見つかっています。彼はF・ゴッティグニース①の全観測の協力者で、イエズス会に所属しているので知り合いがたくさんいます。……イギリスからフランス経由の郵便は非常に不確定で間のびしていますから、返事をもらうにも長いこと待たねばなりません。それゆえ、コック②トン氏③その他は通信網を確保するためにフランダーズ④経由にしています。ですからロンドンからマントヴァ（イタリア北部）まで、帰りはローマからマントヴァまで郵便を無料扱いにしなければなりません。（ダウンズから、一六六八／九年二月十三日付）

〔1127〕ここにまず〔質問の〕細目を同封致しました。（解答）推薦の点でよろしく願います。私のほうでもあらゆる機会に全力を揮って通信者の方々に感謝の念をお伝えする決心であることを請

負います。（ダウンズ宛、一六六八／九年三月九日付）

〔1133〕お手紙拝受。本状をお送りして、私が本日お望みの粉をドーチェスター①・キャリヤーで発送した件をお報せします。その宿舎はホルボーン橋のキングス・アームズで、つぎの土曜日昼頃にはロンドンに着くでしょう。（小さな箱に入っていますので）当日午後だれかに取りに行ってもらうのが好都合と存じます。なくしたり大きな包みにまぎれこんだりしないように、です。その箱は紙で包み、あなたのご指示通り、あなた宛の表書きをしております。（ドーセツトシャーのヨシユア・チルドレイより、一六六八／九年三月二十二日付）

おわりに

以上、具体的な郵便および通信上の問題例をあげて検討して来た。I巻からV巻までのケース数は8、7、7、6、11で全部で三十九件である。この中で郵便の遅れや不明についての苦情を訴えているものは十五件（うち三件は書籍類）だから、四割近い。あとは事務的なものやルートなどについての指示などである。こういう問題についての対策がどのように示唆されているかを見ると、行方不明になることも考えて同じ書簡や小包を複数個作る方法が二件見られる。またオルデンブルクが始めたように郵便か荷物か、その違いによって宛先を分け明示しておくことも考えられている。一方、運送を請負った人物への信頼感がどの程度か事前に考える必要もあろう。しかしこれらの例でもっとも効果的な対策は、運ぶべきものと行先を考えて、最適のルートを見つけ出すことである。ルートは単なる路線ではなく、それをつ

なき中継集配業務が確実に遂行できる人物もあわせて考えなければならぬ。

オルデンブルクがロンドン—ローマ間のルートを設定する構想のさ、フランダース経由でなくマントヴァ経由にする相手の提案に賛同したなど、その好例であろう。

けっきょく、十七世紀後半における科学の通信網形成という事業は、数々の郵便制度の未成熟と運営上の不手際がもたらす障害を克服していかねばならなかったが、その最たるものは最適経路の選定ということに帰着する。ただしそれは単なる紙上の図面で完成するわけではなかった。地理的な配慮も重要だが、文化的優先順位も考慮し、それ以上人間同士の知己としての親密な信頼関係のネットワークが重視されなければならぬ。そう見てくると、オルデンブルクが、まず内外の多様な研究者や愛好者たちとの間で、心安く頼み頼まれる関係を精力的に構築していることの意味が鮮明になるであろう。すなわち瑣末なまでの郵便への気配りがあってこそ、世界の「クリアリング・ハウス」としてのオルデンブルクの夢も実現可能になるのである。

本稿では、ひとまずここで課題を後期秘書時代の通信網形成努力に移して、その信頼関係の危機管理ともいへば研究のプライオリティ論争の処理方法を今後の問題として残しておくことにしたい。

注

▼本稿の暦年表示は旧暦による。一月一日から三月二十五日(旧暦年末までは二重年記(たとえば一六六五/六)とする。

▼引用文献中類出のものは以下の略記を使う。

“Correspondence”: A. Rupert Hall & Marie Boas Hall (ed. & translated), *The*

Correspondence of Henry Oldenburg, 13 vols., Madison, Milwaukee, London, 1965-1986.

拙稿「秘書以前」・金子務「王立協会秘書」以前のオルデンブルク—十七世紀後半ヨーロッパの科学通信網の形成へ—『大阪府立大学紀要人文・社会科学』第三十五巻(一九八七年)、十七—三十二頁。

拙稿「トランザクションズ」・金子務「フィロソフィカル・トランザクションズ」の誕生—王立協会秘書時代のオルデンブルク第一部—『同右』第三十六巻(一九八八年)、三十一—四十六頁。

(1) 樺島忠夫本学教授の協力による。その成果の一端は、日本科学史学会第三十三回年会(一九八六年)と同第三十五回年会(一九八八年)に予稿とともに発表した。目下、その量的解析の論文を準備中である。

(2) Preface to vol. I of “Correspondence”, p. xix: A universal “Office of address” である。

(3) Carl H. Scheele, *A Short History of the Mail Service*, Washington, 1970, p. 30.

(4) イギリスの郵便事情については星名定雄著『郵便の文化史—イギリスを中心に—』(みすず書房、一九八二年)に詳述されている。本稿もそれに負っている。

(5) 当時の手紙は、縦横5×8cmほどの全紙かその一部を切りとって手紙を書き、書き終えたら縦横5×5cm程度に折り畳んで、裏面の白紙の部分に宛先を書く。また内容が盗み読みされないように、手紙の端をロウで封印した。ときには糸とロウも使った。封筒が使われるのは十九世紀に入ってからである。このときの用紙が一枚のものをシングル・レター、二枚使ったものをダブル・レターという。詳しくは、星名、前掲書、十五、三十五頁を見よ。

(6) 同書、付表(第五表、第六表)、x xvii頁参照。

(7) 拙稿「秘書以前」参照。

(8) オルデンブルクが「外交官」出身でブレーメン市を代表してクロムウェル

- らと交渉したことは既述した(前掲拙稿)。このさい外交ないし外交官という言葉がフランスで初出したのは、十八世紀末、それが英語に入っていたのが十九世紀初頭というから、厳密には「交渉家」(Négociateur; negotiator)というべきかもしれない。十八世紀初頭のフランスの「外交官」カリエールの「外交談判法」(坂野正高訳、岩波文庫)の原題も、François de Callières, *De la manière de négocier avec les souverains*, Paris, 1716で、公的な場における、あるいは君主・国家間の「交渉」を意味する *négociat* または *négociation* を使っている。外交ないし外交官の言葉も含めて、同書訳注、献呈文(2)を見よ。
- (9) Letter 1 (to Gerard John Vossius (1577-1649), 16 Aug. 1641). フォスはハイデルベルク生れ、ライデンとアムステルダムに一六三二年以降居を移した偉大な古典学者。拙稿「秘書以前」注(19)参照。
- (10) 小さな皮装(Liber Epistolaris (Royal Society MS. MM1))がある、と云う。これらはホール夫妻により、オルデンブルクの交信記録ノートやルーズリーフとの照合で日付同定が可能になった。
- (11) Thomas Birch, *The History of the Royal Society*, 4 vols., London, 1756. なおホール夫妻は、オルデンブルクの往復書簡集を編むに際して、執筆者名と執筆年月が特定できるものは実物が不明の書簡も、すべて通し番号をつけてその旨記載している。そのさい、バーチの記録が大きな手がかりを与えている (Preface to vol. I)。
- (12) ハートリプとそのサークルとの関連は拙稿「秘書以前」二十一頁および注(25)を見よ。なお筆者の量的解析結果によれば、ハートリプの総便数79 (オルデンブルクへ送ったもの31、受け取ったもの48)、一六五六年六月に始り六〇年三月に終る。総便数に通信期間月数をかけた通信重要度示数(CIは3555で第十六位。同様にホイールは総便数159 (送58 / 受10)、CIは37047で第二位。
- (13) 拙稿「トランザクションズ」に詳しい。
- (14) John Beale (1603-82/3), ケンブリッジ、キンクス・カレッジのフェロー。
- ヴァーチュオーソの典型で、はじめヒアフォードシャー、一六六〇年以降は、イエオビルの教区牧師。リンゴ酒等の研究。総便数92 (送67 / 受25)、CIは19780で第五位。ホール夫妻によればオルデンブルク宛の断片、メモ類が多数王立協会の書簡コレクション(おもにMS. B1)にあるが、期日が不明なため、書簡集に収載されていない。
- (15) Sir Robert Southwell (1635-1702), オックスフォードのクイーンズ・カレッジで学び、フランス、イタリアを旅し、アイルランドに戻り、初めキンセル、のちダブリンに住む。政治外交官。一六九〇—九五年王立協会総裁。総便数27 (送13 / 受4)、CIは1921で二十七位。
- (16) William Breton (1631-79/80), プレタで教育を受ける。王立協会評議員に一六六三年四月に。六四年男爵。音楽の才があった。総便数4 (送0 / 受4)、CIは520で第六十五位。
- (17) John Wallis (1616-1703), オックスフォードの代表的数学者。拙稿「秘書以前」参照。総便数268 (送150 / 受118)、CIは42076でともに第一位。
- (18) Sir Robert Moray (c. 1608-73), 外交官、忠実な王党派。総便数34 (送20 / 受14)、CIは204で第九十五位。
- (19) Preface to vol. II, p. xvi.
- (20) Johann Hovel (ラテン化してHevelius) (1611-1687), タンツィヒの当代最高の国際的天文学者。王立協会外国人会員に。総便数107 (送53 / 受54)、CIは18939で第六位。
- (21) Eccard Lechner (1612-90), 一六四六年よりエルフルトの医学教授。神学者。ハーヴェイ、ファン・ヘルモンツ、デカルトなどの新思想の反対者。総便数3 (送2 / 受1)、CIは21。
- (22) Johann Daniel Major (1634-93), プレスラウ出身。ハンブルクで開業医。一六六五年にキール大学教授。総便数4 (送2 / 受2)、CIは584で第六十位。
- (23) Philipp Jacob Sachs (1627-72), プレスラウ出身の開業医。パドヴァ大で医学博士。総便数11 (送5 / 受6)、CIは913で第四十三位。

- (24) Benedict de Spinoza (1637-77). 総便数 30 (送 13 / 受 17) で第二十二位。CH は 5220 で第十三位。
- (25) Pierre Petit (1594 or 1598-1677)。技術者、天文学者、数学者。パリで一六三三年頃よりメルセンヌやパスカルと親交。一六四六年ルーアンでパスカルと共にトリッチェリの実験をフランスで初めて実施。総便数 9 (送 5 / 受 4)。CH は 864 で第四十五位。
- (26) オズーについては拙稿「秘書以前」注 (54)。総便数 24 (送 17 / 受 7)。CH は 3480 で第十七位。
- (27) Henri Justel (1620-93)。ルイ XIV 世の秘書。父を継ぐ。ユクノーのため一六八一年イギリスに亡命。王立協会会員。総便数 122 (送 93 / 受 29)。CH は 20252 で第四位。
- (28) Peter Serrarius (1636-?)。ヘルギー出身の神学者。スピノザと親交あり。オランダの通信拠点となる。しかし書簡はあまり残っていない。総便数 1 (送 1 / 受 0)。
- (29) John Winthrop (1606-76)。トリニティ・カレッジ等で教育。一六三二年父に従ってニューイングランドへ。一時英国に戻り、王立協会会員。総便数 19 (送 11 / 受 8)。CH は 2109 で第二十一位。
- (30) Richard Norwood (1590-1675)。数学教師で探検家。一六三〇年代からバシレータに。総便数 6 (送 2 / 受 4)。CH は 336 で第八十位。
- (31) 「金銭的收入のみが、ジュステルのほとんど判読し難い筆跡と退屈きわまるコンニップを何年もの間耐えていた理由を説明する」とホル夫妻は記す。Introduction to vol. II, p. xxv.
- (32) 拙稿「秘書以前」参照。
- (33) Letter 652 (from Peter Serrarius, 5 July 1667).
- (34) Richard Lower (1631-90/91)。書簡はなし。
- (35) René François de Sluse (1622-85)。ヘルギーの数学者。イタリヤで学び一六五三年リエージュに戻り、名声を得る。微積分法に後に関連することかわかる手法を開発。総便数 79 (送 40 / 受 39)。CH は 8690 で第九位。
- (36) Nathaniel Fairfax (1637-90)。ケンブリッジを去ってライデンで一六七〇年に医学博士。サフォークで開業。総便数 30 (送 18 / 受 12)。CH は 9000 で第四十四位。
- (37) Samuel Coleprese (?-1669)。プリマス近くの出身。一六六八年ライデンで医学を学ぶ。総便数 30 (送 17 / 受 13)。CH は 980 で第三十七位。
- (38) Marcello Malpighi (1627/8-94)。世界的な顕微解剖学者。マルピーギ管を発見。総便数 56 (送 28 / 受 28)。CH は 6160 で第十三位。
- (39) Francisco Travigino (生没不明)。マイナーな天文学者。総便数 18 (送 7 / 受 11)。CH は 2016 で第三十五位。
- (40) Manfred Setrata (1600-80)。シラノの有名な医師の息子で技術者。燃焼鏡の研究。総便数 3 (送 1 / 受 2)。CH は 9 位低下。
- (41) Sir John Finch (1626-82)。バドゥアに住み、ピサ大学教授。一六六五年トスカナ大公付イギリス大使に任命される。一六六三年以来の王立協会評議員。総便数 7 (送 1 / 受 6)。CH は 581 で第六十二位。
- (42) Stanislas Lubienietzki (1623-75)。ポーランドのクラカウ出身の天文学者。のち宗教問題で母国を追われ、デンマーク王に仕える。反対派によりハンブルクで毒殺される。総便数 12 (送 7 / 受 5)。CH は 180 で第百位。
- (43) 拙稿「秘書以前」十七頁、同注 (1) を参照。マカロッティの総便数 11 (送 8 / 受 3)。CH は 561 で第六十四位。
- (44) W. E. Knowles Middleton, "Some Italian visitors to the early Royal Society", *N. R. R. S. L. vol. 33* (1978-77) 4-5 Marie Boas Hall, "The Royal Society and Italy." *ibid.*, vol. 37 (1982-83) を参照。
- (45) Martias Paisen (1643-70)。ハンブルクの医学博士。病院勤務、未公刊の解剖学的観察をシラス。総便数 15 (送 8 / 受 7)。CH は 420 で第六十九位。
- (46) Martin Vogel (1634-71)。医学博士。ハンブルクで開業。一六七二年に同地ギムナジウムで論理学と形而上学の教授。総便数 37 (送 18 / 受 19)。CH は 2775 で第十九位。

- (47) John Collins (1624/5-83). 道具製作人から数学を学び、大学に行かなかった。一六五〇年代にロンドンの数学グループを介してジェイムズ・グレゴリー、アイザック・ニュートン、ジョン・ウォリスらと知り合う。一六六七年王立協会会員に。総便数18 (送18 / 受0)。CHは1800で第二十五位。
- (48) Christopher Wren (1632-1723)。クレスナム・カレッジ、のちオックスフォードの天文学教授。数学上の業績も多く、またホイヘンスと独立に完全弾性衝突法則を発見。ロンドン大火後、建築家として都市復興に力を尽くす。総便数6 (送3 / 受3)。CHは834の第七十一位。
- (49) Joseph Glanvill (1636-80)。哲学者。オックスフォード、エクセター・カレッジ卒。王立協会の内部批判者。総便数20 (送10 / 受10)。CHは680で第五十六位。
- (50) Joshua Childrey (1623-70)。オックスフォードで一六六一年に修士、教育者。総便数15 (送9 / 受6)。CHは210で第九十四位。
- (51) Francis Vernon (1637-77)。オックスフォード、クライスト・チャーチで学ぶ。外交官としてスウェーデン、フランスなどに赴任。のち旅行の途次殺される。総便数37 (送24 / 受13)。CHは3034で第十八位。
- (52) 拙稿「暗号術と「ライオリティ」」『無限大』No.78(昭和六十二年夏号)、日本IBM刊に詳しく論じた。
- (53) おそらくCharles de Cocherel (?-c. 1668)。ノルマンティの貴族の出。軍人として著名。総便数7 (送4 / 受3)。CHは385で第七十位。
- (54) Jean Pierre de Martel (生没年不明)。ホルドー出身、パリのユクノー系医者。エクサン・プロヴァンス大学解剖学教授。総便数8 (送3 / 受5)。CHは1208で第二十三位。
- (55) John Downes (1627-94)。バドプで学びライデンで医学博士(一六六〇年)。一六六七年王立協会会員に。総便数4 (送1 / 受3)。CHは16。
- (56) Regnier de Graaf (1641-73)。ライデンのシルウィウスの愛弟子。ソミュールで医学博士(一六六五年)、パリで交友し、オランダのテルフトで開業。解剖学的研究。総便数19 (送9 / 受10)。CHは1102で第二十五位。
- (57) Father Nathanael Southwell (1598-1676)。ローマのイングリッシュ・カレッジで教えるイギリス人。イエズス会の代々の総会長秘書。
- (58) William Aloysius Lesley (1641-1704)。一六六一年にイエズス会士に。のちローマのスコッツ・カレッジ長に。
- (59) Francesco Nazari (1634-1714) の子。ローマのコレギウム・サピエンティアエ(知恵のカレッジ)において、この「ジョルナレ」を一六六八年一月ローマで刊行し始めた。
- (60) この書簡の十ヵ月ほど前、一六六八年三月二十六日に王立協会にこのへの提案が認められ、「協会宛の外国郵便料金はアーリントン卿の好意でイギリスで精算される」ことが決まった。
- (61) Gilles François Gottignies (1630-89)。イエズス会士。ブリュッセル出身の数学者で天文学者。
- (62) George Cotton (c. 1636-1697)。イギリス人のイエズス会士。イギリスで布教し、ロンドンで没。当時はローマにいたのだろう。
- (63) 北海沿い、ドーバー海峡からシェルト河口にかけての地方で、ベルギー西部、フランス北部、オランダ南西部を含む地域。
- (64) イングランド南部ドーセットシャーの首都。